

豊田市郷土資料館 だより

No.73

Toyota City Museum
Of
Local History



地域学習サポーター

目次

・資料調査報告 駒場町徳念寺所蔵の経典調査について	2
・地域資源としての「献立表」～特別展「祝い・宴・贈り物・芸能」に向けて①～	3
・近代の産業とくらし発見館企画展「とよたに電燈が灯った日～電力の源 矢作川～」	4
・牧野義雄・郷土の偉人としての評価について	5
・企画展「古い道具と昔のくらし展～電気がなかった頃のくらし～」	6
・歴史的町並みの保存とまちづくりー伝統的建造物群保存地区制度ー②	
・スクールサポート事業 豊田市地域学習サポーター事業開始	7
・文化財シリーズ73 国指定文化財 杉本の貞観スギ	8
・資料館NEWS	

資料調査報告

駒場町徳念寺所蔵の經典調査について

駒場町の徳念寺は文亀3年（1503）創建と伝えられる浄土真宗西本願寺派のお寺です。お寺には文化6年（1809）に建立されたと伝えられる「転輪蔵」と呼ぶ土蔵があります。この土蔵の中には經典を納める回転式の書架である輪蔵や壁際に沿って木製の本棚が置かれ、たくさんの經典・書物が納められています。

平成21年7月21日～28日にかけてお寺と檀家の皆さまのご協力の下、豊田市史編さん室による経蔵内の經典の調査を行いました。まず、経蔵内で經典1冊ごとに仮番号を記した附せんをはさみ、本堂の縁側に運びました。次に、縁側で經典に積もったほこりや汚れを刷毛で払いました。檀家の皆さまには仮番号付けと經典の移動、及びほこり落としの作業に参加していただきました。その後、本堂内に特別に場所をお借りし、1冊ごとに附せんと一緒にデジタルカメラにて写真撮影をしました。点数が多かったため、撮影箇所を表紙と内題部分の2か所に絞りました。

調査終了後、撮影したデータを編さん室に持ち帰り、パソコン画面を見ながら、經典の目録を作成しました。經典の表題には日ごろ目にすることのない漢字が多く使用されているので、入力作業に時間がかかりましたが、4月には一通り目録も完成し、最終点検の後、7月にお寺と檀家の皆さまへご報告することができました。

徳念寺の經典は、和装本と呼ばれる形態で、総数は4202冊あり、中央部の輪蔵に2177冊、周りの本棚に2025冊収納されていました。輪蔵は8面からなり、1面には240冊～350冊が収納されていました。輪蔵の經典は帙ちと呼ばれる収納ケースに5～12冊の単位で収納されており、比較的破損が少ない状況で保管されていました。一方、本棚は63列あり、少ない棚には30冊、多い棚には134冊が収納されていました。こちらは帙ちには収納されていませんでした。一部、水害の影響を受けたのか、土がついた冊子があり、綴じていた糸が切れてバラバラになっているものもありました。

徳念寺の經典は、一切經とそれ以外の經典・書物に分けられます。一切經とは『大藏經』とも言い、仏教の經典の総称で、5048巻になります。奈良時代には朝廷の命を受けた一切經の書写が行われ、鎌倉時代から

室町時代にかけて中国や朝鮮半島で印刷された一切經が輸入されています。江戸時代に入り、延宝6年（1678）に京都万福寺の鉄眼という僧侶が一切經の版木を作成し、この版木で印刷された經典が日本各地に広まっていきます。鉄眼による一切經を鉄眼版一切經と呼び、万福寺の宗派名をとって黄檗版おうばく一切經とも言います。徳念寺の一切經も冊子の奥書より、鉄眼版であることが分かりました。これらの一切經はおもに輪蔵に納められていました。

一方、一切經以外の經典は、浄土真宗の教義を記した書籍や開祖親鸞上人や蓮如上人の行状記、浄土真宗で用いる經典の注釈書などが多くあり、本棚に収納されていた冊子の大半を占めます。出版物だけでなく、本山の僧侶の講義を記したノートも含まれています。また、浄土真宗関係の書籍以外にも法華經や大日經の注釈書などが含まれていることも特筆できます。

本棚には經典以外の冊子も含まれていました。また、先代住職の教科書やノートも納められており、経蔵が經典以外の本を納める目的にも使用されていたことが分かります。

一切經は、経蔵を建築する際に入手したと思われます。一方、それ以外の書物の入手時期は不明ですが、他の寺院の冊子を書き写したものや他寺院のものと思われる蔵書印が押された冊子もあり、寺院の間で書籍の相互利用が図られていたことが分かります。

徳念寺の經典は、大切に保管されてきました。今回の調査も、地元の皆さまの經典を大切にしたいという意向の中で、企画されたものです。この調査は經典調査の取りかかりにすぎないものですが、この先の調査によって多くの事実が分かることを期待しています。

（中島 学 豊田市史資料調査会）



地域資源としての「献立表」

～特別展「祝い 宴・贈り物・芸能」に向けて①～

「献立表」と聞くと皆さん何を思い出すでしょうか？
かくいう私は、まず小学校で毎月もらっていた給食の献立表を、楽しい記憶と共に思い出します。今回ここで紹介するのは、古代～近代までの古文書に見られる食事に関する記載についてです。

歴史的に残されてきた献立表の多くは、日常的な食というよりはむしろ「祝いごと」、すなわち、出産・結婚などの人生儀礼、昇進や居宅新築などの社会的な名誉、祭礼などの年中行事に伴って行われた宴会に関わるものです。また、「不祝儀」、すなわち葬祭などに関わる献立も多く存在しており、食文化の歴史の変遷を知る上でも貴重な資料となっています。

本年度の特別展は、市制60周年を記念して「祝い」の文化を対象として展示の準備を進めています。その調査を通して、市内の特に足助地区を中心に、約50件の献立表が残っていることがわかりました。その資料を見ていくと、山間部でありながら、「イセエビ」「タイ」などの海産物も食材となっており、さすがに物流の中継で栄えた商業地の面目躍如たるところがあります。また、「コイ」や「フナ」など近年ではあまり口にすることが少なくなってきた淡水魚も記されていますが、これらは平安貴族の都での祝宴の食材としても用いられており(『類聚雑要抄』など)、内陸部のタンパク源として長らく重宝されたことがうかがわれます。

調理法についても、今日では一般的ではないものが記されています。現在、古文書の解読を進めています。が、どのような料理か首をかしげるものも多数あります。その内の一つ「白髪栗^{しらがり}」については、足助地区で長らく庖丁を握られてきた料理人 桜井啓三氏に、栗と春雨を用いた揚げ料理ではないかのご教示をいただきました。

近年、こうした「献立表」が各地で注目を集めています。重要なことは、それが単なる博物館展示に留まっておらず、新たな地域ブランド、郷土食を生み出していこうという地元の市民・商工業者・大学関係者の方たちの動きと深い関わりがあるという点です。当市近郊では、名古屋市において、三人の天下人にちなんだ「信長膳」「秀吉膳」「家康膳」という弁当が販売されていますが、これらは民間企業の企画に、中島範氏(東京福祉大学理事長)が監修を加えたもので、いずれも史実・古文書に記載された宴会献立に基づいたものです。開府400年に沸く名古屋を散策するのに欠かせないお弁当となることでしょう。

また、幸田町の浄土寺では、「家忠日記」(徳川家康の家臣であり、浄土寺に帰依した松平家忠が記した日記)に出てくる献立に考証を加え、現代風にアレンジした料理を参拝客に振舞い、好評を博しています。

浄土寺ご住職の飯田大全氏に話をお聞きしたところ、新聞等では報道されなかった重要なことを知りました。それは、元料理人というご住職の経歴もさることながら、寺をこれからいかに運営していこうかという想いを出発点に、アジサイの鑑賞で有名な本光寺(深溝松平家墓所)と連携し、さらにアイディアにあふれた住民、地域の活性化という点で志を同じくする行政マンも加わり、実現されたという点です。地元の食材が生かされている点も注目されます。

これまで私たちは様々な文化財を「保護し次世代へ継承する」ことに力を注いできましたが、今後は「地域資源」として活用するというアプローチも重要になるでしょう。足助地区の「献立表」がそのきっかけとなれば、と秘かに熱望しています。(高橋健太郎)



近世の献立表(足助地区 個人蔵)

平成22年 豊田市近代の産業とくらし発見館企画展 とよたに電燈が灯った日～電力の源 矢作川～



左の写真は郷土資料館事務室入口横に設置された蛍光灯のスイッチです。スイッチを右に押せば、誰でも暗い事務室を明るくすることが

できます…電気の力を借りて。

夜も明るいことが当たり前になった現代。夜遅くに帰宅してもスイッチを入れれば、たちまち部屋全体が昼間のように明るくなります。電気は人々の生活に近代化をもたらした大きな要因の一つと言えるでしょう。電燈の明るさを手に入れた人々は、それ以前と比べて、「できる」ことが大変多くなりました。多くの可能性を秘め、暗闇に明るさをもたらす電燈を初めて見た人々は、一体どう思ったのでしょうか。感動し、驚嘆したことは想像に難くありません。

平成22年7月27日～10月17日の期間、豊田市郷土資料館の分館、豊田市近代の産業とくらし発見館では企画展「とよたに電燈が灯った日～電力の源 矢作川～」を開催しています。とよたの人々の電力への憧れと自家発電の歴史に焦点を当てるとともに、豊富な水量で電源地帯と言われた矢作川水系の水力発電所を紹介しています。

では、初めてとよたに電燈が灯ったのはいつのことなのでしょうか。それは明治33年（1900）のこと。場所は現在の市街地である挙母町でも、塩の道で栄えた足助町でもなく、松平村のガラ紡工場でのことでした。

明治30年（1897）、岡崎に本社を持つ岡崎電燈によって郡界川沿いに岩津発電所が建設されました。当時、岩津発電所から16kmも離れた岡崎の街の中心部まで送電することは画期的な技術でした。そのため、岩津発電所には全国各地から多くの見学者が訪れたと言われています。

岩津発電所の対岸に当たる地区（現豊田市松平地区）の人々の働きかけもあり明治33年（1900）、発電所の出力増設に伴い、とよた初の電燈が灯ることとなりました。



建設当時の岩津発電所（中部電力株式会社蔵）

岩津発電所の建設を皮切りに、矢作川水系には現在では廃止されたものも含め、37箇所もの発電所が建設されていきました。現在も稼働している発電所は26箇所あり、そのうち、豊田市に所在するものは18箇所を数えます。さらに、その中で昭和初期までに建設されたものが15箇所あり、水力発電が近代化に大きく寄与したことがうかがえます。

では、「発電所建設＝地元への電力供給」だったのでしょうか。いえ、決してそうではありません。近隣に発電所が建設されても、電力が供給されなかった地域は多々あります。その場合、地元の人々は自家発電を行うことで電燈の明るさを手に入れようとした。



エジソン電球
（社団法人日本電気協会中部電気協会蔵）

大正年間、小原村の小原電燈や下山村の大沼電燈、または石野電気利用組合や月原電気利用組合など、多くの地域で電力を入手するための動きが起こります。「隣の村には電燈が灯っている…我が村にも電燈を…」と言

った当時の人々の気概や電力への憧れが伝わってきます。

今回の企画展を通して、近代化の象徴の一つでもある電力を手に入れるために尽力した人々の活動と熱意を知り、ぜひとよたの新しい一面を発見していただきたいと思います。

（井上 直己）



小原電燈 点灯式

牧野義雄・郷土の偉人としての評価について

ロンドンで「霧の画家」として名をはせた牧野義雄（1869～1956年）は、豊田市（当時は挙母）出身です。画家としてのみならずエッセイストとしても知られ、挿絵とエッセイを掲載した『カラー・オブ・ロンドン』（1907年）は当時のロンドンの人々に受け入れられ、一躍有名になりました。以後『カラー・オブ・パリ』（1908年）、『カラー・オブ・ローマ』（1909年）、自叙伝『日本人画工倫敦日記』（1910年）、『幼少時代思出の記』（1912年）など牧野自身の著作といえる本だけでも5冊あります。



牧野は長くイギリスに暮らし、第二次世界大戦の混乱中に帰国したため、日本ではあまり知られていませんでした。そのため豊田市では、全国の主要美術館に作品所蔵アンケート調査を行い、昭和59年に豊田市郷土資料館にて「－郷土の偉人…洋画と南画の画家兄弟－牧野義雄・敏太郎展」を開催しました。この展覧会には、義雄の絵画作品がようやく18点出展されましたが、それは東京芸術大学資料館（当時）所蔵の2点と個人蔵の16点のみでした。

その後、イギリスに残された作品も含め、豊田市郷土資料館が平成2年（会場：豊田そごう）に80点を展示した以降、さらに豊田市美術館において国内外の作品の収集を進め、平成9年、平成20年に「牧野義雄展」を開催し、より多くの人々に牧野の絵のすばらしさを知っていただく機会を得てきました。

こうした活動をする一方、絵の評価ではなく、当時の人々にとっての牧野の評価はどうであったのか、といった疑問が出てきました。明治時代、日本のそれも地方の一都市である挙母の人々にとって、遠い外国にいる牧野のことを知る人はいたのだろうか？「郷土に誇れる偉人であった」のか、あるいは「偉人」という評価は後の時代のものであるのか…。

牧野義雄は明治2年（1869）生まれ。挙母藩が版籍奉還をした後とはいえ、武士としての誇りや挙母藩士としてのつながりは、その後もありました。藩校・崇化館の流れをくむ挙母学校（挙母郷学校：明治5年に父牧野利幹らが設立）は「同窓会雑誌」を発行し、会員相互の情報交換や人脈づくりに寄与しました。この「同窓会雑誌」は父利幹が名誉会員、兄敏太郎が幹事を務めていたこともあり、義雄の消息記事が多く掲載されたほか、義雄自身によるエッセイも寄稿されています。こうしたことから牧野の活躍は、挙母においてもかつての武士階級や知識人階級には知られていたと考えられます。

さて、ここに明治43年（1910）10月1日発行『學生』という雑誌があります。東京富山房 毎月一回発行の月刊誌です。この巻頭に牧野義雄の絵「月下のウェストミンスター寺院」が掲載され「英国を震撼せる日本青年画家」として義雄が紹介されています。

「日本固有の色彩を用いて英国の批評家を驚歎せしめし大手腕」「身は巷に窮居すれども名は世界の表に喧伝する牧野義雄氏」と副題がつき、苦勞の末に成功し活躍する様子を伝える内容となっています。ただ残念なことに（もしかすると故意に）出身地を挙母ではなく「近江某藩の藩士」の子としています。この雑誌の発行部数がどれほどあったかはわかりませんが、全国的な学生向け雑誌に掲載されたことは、当時の人にとっても義雄という人物が評価されていたと考えられます。



さて、この雑誌は当館の所蔵資料です。市民から寄贈を受けた教科書類の中に入っていました。牧野のページには赤鉛筆で丸く印がつけられ表題には赤線が書き込まれています。雑誌の所蔵者は牧野の知人であったかも知れません。しかし、残された雑誌からは郷土の偉人の活躍を喜ぶ様子が伝わってきます。

（伊藤 智子）



企画展 古い道具と昔の暮らし展 ～電気がなかった頃の暮らし～

現在、豊田市郷土資料館では、企画展「古い道具と昔の暮らし展 ～電気がなかった頃の暮らし～」を10月17日まで開催中です。市民の方からご寄贈いただいた、江戸時代から明治・大正・昭和大の「衣」「食」「住」に関わる道具、「ちょっと昔の文房具」などを展示しています。

豊田市の小学校では、4年生の社会科で「古い道具と昔の暮らし」という単元があります。その学習のために、郷土資料館には多くの学校が見学を訪れます。見学に訪れる子どもたちにとっては、石油ランプ・氷冷蔵庫・足踏みミシンなどなじみのないものばかりで興味津々な様子です。「何に使ったの?」「どうやって使うの?」といった質問が次々と飛んできます。実際に昔の道具を体験してみた後には、「昔の人は全部自分たちでやらないといけなから大変だったんだ」、「今よりも昔の暮らしの方がエコだと思う」といった声があがりました。

ワークショップ「昔の音色にタイムスリップ!」では、手回し式の蓄音機で昔のレコードを聴くことができます。懐かしいメロディに合わせて、手拍子をしてながら聴いてくださるお客様もいらっしゃいます。企画展開催期間中はいつでも聴くことができますので、ぜひ郷土資料館へおでかけください。

今回の展示をするにあたり、電気がなかった頃というのは、昔といってもほんの少し前のことであるということに驚かされました。ここ数十年の暮らしの変化の大きさを、子どもたちが感じとってくれたらと思います。

(不破 恵理)



歴史的町並みの保存とまちづくり

－伝統的建造物群保存地区制度－②

足助町の歴史的町並みでは、6月30日より3日間の日程で文化庁主催による伝統的建造物群保護行政研修会（基礎コース）が開催されました。

この研修は、伝統的建造物群保存地区の制度導入を予定している地方公共団体や既に実施している地方公共団体の職員、伝統的建造物群の保存に関わる専門家・技術者を対象とし、必要な専門的事項について研修を行うことで担当者の資質を向上し、この制度の普及と円滑な運営を図ることを目的としています。

開講式には、北は秋田県、南は沖縄県の全国から集まった51名の研修生が東京藝術大学の上野勝久先生による町並み保存論、名古屋市立大学の溝口正人先生による都市史・民家史特論などの講義を受けました。

7月1日には、研修生が足助の町並みを歩き、その後、伝統的建造物群保存地区の保存計画についての演習や討議を行いました。



豊田市では、伝統的建造物群保存地区制度を活用して足助町の歴史的町並みを保存することにより、地域の活性化を目指しています。街道筋・河岸・山並みや小路など数多くの魅力を持ち、それらが一定のリズム感のある景観をかもし出す「足助らしさ」を全国に発信しました。

(多和田 篤嗣)

豊田市地域学習サポーター事業開始

藤岡地区では、本年度より、豊田市地域学習サポーター事業をスタートしました。地域にある資料館の資料を活用するとともに、地域の歴史や文化などに詳しい方を講師として小中学校の学習に生かしていくことが目的です。藤岡地区では、豊田市地域学習サポーター（以下サポーター）として現在16名の方に登録していただいています。郷土史・農業・養蚕・陶芸・民具など色々な分野で豊富な知識を持った方たちが、藤岡民俗資料館の資料を使ったり、出前授業に出かけたりして地区の小中学校の学習支援を行います。

藤岡民俗資料館での見学サポート

藤岡地区にある小学校の6年生は4～6月にかけて社会科の授業や総合学習として、水汲遺跡^{みずくみ}の学習のために藤岡民俗資料館にそれぞれ来館しました。地元に住むお年寄りで構成されたサポーターの温かい笑顔に迎えられ、打ち解けた楽しい雰囲気の中で学習が始まりました。



水汲遺跡は、藤岡地区の下川口町にある縄文時代の住居跡や平安時代までの遺物が多数発掘された市内でも重要な遺跡の一つです。サポーターからの「縄文時代の人はどうしてこの場所に住んだのでしょうか。」という質問に、「水がすぐ飲めるから。」「魚が捕まえられるから。」と子どもたちなりの発想で意見が出されました。サポーターはうなずきながら子どもたちの考えを受け止め、さらに「ここは、いくつもの川が合流する場所で、人やものが行き来する重要な場所でもあったんだよ。」と説明を付け加えます。

水汲遺跡の年代や位置などの概要について全体で話を聞いた後、子どもたちは、二つの班に分かれて、体験学習と展示品見学を行いました。

体験学習では、水汲遺跡から出土した本物の縄文土器を使って学習しました。「何千年も前の人たちが

使っていた本物の土器だよ。」と手渡すと、子どもたちは目を輝かせて土器片を手に取り、色や手触り、中にはにおいまで確かめる子もいます。他の時代の焼き物などと比較して、どこがどのように違うのかを考える土器クイズで楽しみながら理解を深めていきました。

見学では民俗資料館に常設の展示されている水汲遺跡の石器や土器についてその名称や使い方などについて学習しました。ただ単に説明に耳を傾けるのではなく、サポーターの問いかけに答えたり、分からないことを質問したり、あれこれと対話しながら学んでいきます。「縄文土器は、何に使われたのか分かる？」

「食べるものを保存するため？」

「料理するのに使ったんじゃないかな。」

「そうだね。じゃあどんなものを料理したんだろう？」

サポーターも自分の孫のような子どもたちとのやり取りを楽しみながら、いきいきと明るい表情で学習を支援していました。

子どもたちの感想には「縄文時代の土器にはきれいな縄の跡がついていてびっくりしました。」と本物の土器に触れた感動を述べる内容や「始めから最後まで親切に教えてくださったので、たくさんのが分かり本当に良かったです。」と地元のお年寄りならではの丁寧な説明に対するお礼のことばがたくさん綴られていました。

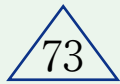


今後の予定

藤岡民俗資料館では、このあと4年生で学習する「昔の道具とくらし」についてのプログラムを準備しています。さらに、地域の偉人や史跡などについても要望に応じて出前授業サポートなどを実施したいと考えています。

また、地域学習サポーター事業については、藤岡地区以外の地域にも拡大していく予定です。（杉本 満）

文化財シリーズ



国指定文化財
杉本の貞観スギ

杉本の貞観スギは、旭町杉本にある神明神社の境内にあります。

神明神社が貞観年間(859～876)に創建されたと伝えられており、このスギはその創建時社殿の前に植えられたことから「貞観スギ」と呼ばれています。

スギは国内の樹木では最も寿命が長く、まっすぐに成長するため、神社仏閣の境内に植えられることが多く、伐採されることなく成長してきたものが多くみられます。杉本の貞観スギは、そのなかでも樹齢1000年以上を誇る県下最大のスギであり、前に立つとその大きさに思わず圧倒されます。

地名が杉本となっていることから、貞観スギの圧倒的な存在感を、古くから地元の人々も感じながら暮らしていたことがうかがえます。



貞観スギ

参考文献 中野洋治『愛知の巨木』(2005年、風媒社)
〈お詫び〉

文化財シリーズ72の市場城跡について、県指定文化財と紹介しましたが、市指定の誤りでした。お詫びして訂正します。

資料館 NEWS

「夏休み子ども月間・4館合同スタンプラリー」を開催しました。(7月17日～8月31日)

夏休みに合わせて毎年開催している「夏休み子ども月間」では、「火起こし体験」と「お宝さがしなぞとキラリー」、ワークショップ「どうたくんとすえちゃんの写真立てを作ろう!」などを体験しようと多くの子どもたちが郷土資料館に遊びにきてくれました。

「4館合同スタンプラリー」は、郷土資料館・近代の産業とくらし発見館・民芸館・美術館の4つの館のうち3つを見学しスタンプを集めると、ミュージアムならではのお宝と交換できるというものです。大人にも子どもにも人気の企画で、中には1日で3つのミュージアムを自転車で回るという元気な子どもたちもいました。



現在開催中の企画展

○「古い道具と昔のくらし展 ～電気がなかった頃のくらし～」

10月17日(日)まで ※月曜休館(祝日は開館)

9時～17時・入場料無料

ところ：豊田市郷土資料館(陣中町1-21)

○「とよたに電燈が灯った日 ～電力の源 矢作川～」

10月17日(日)まで ※月曜休館(祝日は開館)

9時～17時・入場料無料

ところ：豊田市近代の産業とくらし発見館(喜多町4-45)

豊田市郷土資料館 今後の企画展・特別展の予定

○企画展「徳川十六将 榊原康政～とよたが生んだ名将～」

10月26日(火)～11月28日(日)

○特別展「祝い～宴・贈り物・芸能～」

1月29日(土)～3月13日(日)

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)

入場料 無料(特別展開催中は有料)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より 徒歩15分

駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.73 ■

平成22年9月7日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。